Column コラム

OECD農業局での勤務

福田　竜一

筆者は農林水産政策研究所とOECD（経済協力開発機構，本部：フランス・パリ）との研究員人事交流要員として，2003年1月から同年12月末までの1年間，同農業局貿易・市場課アドミニストレーターとしてパリで勤務した。筆者は同局が開発した各国の農産物需給を予測する計量モデル一AGLINK（アグリンク）一の日本モジュールを担当し，また飼料需要モジュールの改良作業に従事した。そこで本稿では，筆者の1年間のOECD勤務と体験について簡単に紹介してみたい。

筆者が着任したのは2003年の1月初めであった。パリ到着の前日は，パリでは珍しく数センチの積雪があり，パリ在住が長い人に聞けば口をそろえて「今年はとても寒いし，パリに雪がこんなに積もるなんてもうずっとなかった。とても珍しい。」と言っていた。赴任した頃は朝8時ごろでもまだ辺りは暗く，通勤時は震えるような寒さであった。

パリは寒かったのだが，職場は熱気を帯びていた。同僚たちは皆，締め切りが迫っていた“OECD Agricultural Outlook”のための原稿や資料作成の真っ最中にあったのだ。AGLINKはOECD加盟諸国および非加盟国（ブラジル，中国等）を含む農産物需給をモデル化しており，AGLINKによる農産物市場の見通し結果等をまとめた報告書が“OECD Agricultural Outlook”である。この“OECD Agricultural Outlook”は，農業政策モニタリングレポートと並び，OECD農業局の2大刊行物である。

筆者の到着時は貿易・市場課では1年で最も忙しい時期であったのだが，春を過ぎる頃になるとおおむね作業は終了した。このあと次年度の作業が始まるまでは比較的閑散な時期が続く。この時期にはOutlookとは別個に課題を持っている職員はそのための勉強や下準備を進めたりする。筆者もようやく生活に慣れ，仕事をこなすようになっていった頃でもあった。

先述の通り，冬のパリは厳しい寒さであったが，夏になると一転して今度は何十年に一度の猛暑に見舞われた。夏のパリで気温が30度を超えるのは珍しい方だが，その年は酷い日で40度を超えるという異常さであった。家は無論のこと，自動車にも職場にもエアコンなどというものは無いのがパリの常識である。この時は職場も開店休業状態にならざるを得なかった。筆者のパリ滞在は夏冬ともに異常気象に遭うという悪運（？）に恵まれたのである。

ところでフランスといえば夏のバカンスが有名だが，実際にも夏に休暇を取る職員は多い。ただし，期間はせいぜい2週間ほどで，1ヶ月丸々休むという人はさすがにいない。フランス人はバカンスのために働いているなどと言う人もいるが，しっかり働いてしっかり休むというのは，いかにもメリハリが利いているし，仕事のモチベーションも高まり，かえって効率的なのではないだろうか。

さて夏が過ぎ，パリにも短い秋が訪れ，駆け足で冬がやってきた。貿易・市場課でも次のOutlookの編集に向けての農産物需給予測作業のため，また忙しい日々が始まった。実際今年の作業には，例年にはない2つの課題があった。1つは今年から予測期間が延長されたため，必要なマクロ経済のデータなど，モデルの外から与えなければならないデータの入手に苦労したことである。もう1つはEUの加盟国増大に対応するための更新作業が難航したことである。このため，週1回のミーティングは常に2時間以上に及んだ。しかし派遣期間の都合があって，筆者は作業途中で帰国しなければならなかった。これは唯一の残念な事である。

以上1年間という短い期間であったが，日本では得がたいパリでの体験や経験を今後十分活かせるよう，一層努力して参りたい。